

特集

総合純真学

濱田 維子

前純真学専門部会長

Synthesis of JUNSHINGAKU

Yukiko HAMADA

Director of the department of JUNSHINGAKU

【要旨】 本学独自の教育カリキュラムである純真学は、6つの科目で構成されており、各科目で建学の精神『気品』『知性』『奉仕』に即した自校教育・人間教育に取り組んでいる。2018年で純真学は完成年度を迎え、その統括科目である「総合純真学」について、一流を知る、建学の精神を再考する、そして純真学を通して期待する人間力について考えるという3つの目標に沿って科目評価を行い、自校教育・人間教育の重要性と教育プログラムの構築の必要性を再確認した。

1. 緒言

大学における教育の目的は何か、それまで抽象的な表現でしか掲げられなかった事柄を、具体的な学習成果として示されたのが、中央教育審議会が提示した“学士力”である。学士力は、①多様な文化や、社会と自然に関する知識の理解、②コミュニケーションスキルや情報リテラシー、問題解決力など生活に必要な技能、③自己管理力や協調性、倫理観、生涯学習力といった態度・志向性、④獲得した知識・技術・態度等を統合的に活用した課題解決能力の4つの能力で説明されている¹⁾。2016年に本学で設置した純真学科目における最終目標は、これら学士力をバランスよく高め、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力、つまり“人間力”²⁾を高めることにある。

現在私たちは、コロナ禍と言われるまでに深刻化した未知のウイルスによって、病気の治療だけでは解決できない課題に直面している。予防や対応に必要な情報や正しい情報を選択するにはどうしたら良いか、感染者へのスティグマや差別とはどう戦えば良いのか、医療体制や経済的問題への対策はあるのか等々、これらの危機を乗り越えるには、まさに人間力が必要とされているように思う。

しかしながら、人間力の定義に一つの正解があるわけではない。建学の精神『気品』『知性』『奉仕』を通して、学生あるいは教職員、卒業生が感じるそれぞれの人間力があると考え。純真学は、建学の精神を基盤とした豊かな人間性や感性を兼ね備えた医療人の育成を目的とした本学独自の教養教育プログラムである。広く社会や文化に興味関心を持ち、学習や経験を通して自らの目標と課題を見出すことを目指した純真学では、1年次より2年次にかけて、建学の精神と創設者の思いを学ぶ「純真学入門」、文化への理解を深め、礼儀・作法を学ぶ「社会人セミナー」、コミュニケーションスキルと情報リテラシーを身につける「コミュニケーション論」、奉仕活動から他者との関係形成と地域貢献を学ぶ「ボランティアとキャリア形成」、海外研修で異文化への理解を深める「異文化交流」の5科目が開講する。それらの統括科目として3年次を開講するのが「総合純真学」である。本科目では、3年間の純真学科目を通して、それぞれの学生が、建学の精神をどのように理解し、どのような“人間力観”を持つのか、深く考える機会を提供し、1年後に社会に求められる医療人を目指す。

本稿では、純真学の統括科目である「総合純真学」での取り組みについて紹介する。

2. 総合純真学の概要

2.1 科目のねらい

総合純真学は、看護学科、放射線技術科学科、検査科学科、医療工学科の全4学科の必修科目（15時間）で、3年次通年で開講している。受講者数は、毎年300名前後である。科目の到達目標は、①建学の精神である気品、知性、奉仕について、自分の考えを説明できる。②一流とは何かを感じ取り、自己啓発のための行動ができる。③社会人として必要な“人間力、統合力”とは何かを考え、達成に向けた行動ができる の3つである。

2.2 科目運営と授業展開

純真学科目の企画・運営・評価は、教職員メンバーで構成する純真学専門部会に一任されている。初年度の総合純真学については、一流を感じさせる文化施設とそのテーマについて、部会での意見交換を重ねてきた。ミュージカルや音楽鑑賞、福岡の代表的な伝統工芸品である博多織や博多人形の文化と製作など、様々な施設について調べ、多様なテーマや授業方法が提案され、その中で、初年度は、日本の伝統芸能である歌舞伎をテーマに授業展開を試みることとなった。単なる観劇会ではなく、百年以上引き継がれてきた世襲制による歌舞伎の歴史と背景について理解を深め、技芸を引き継ぎ磨くことに一生を捧げる歌舞伎役者に一流を見ることを期待して、授業内容を検討した。また学生は、1年次に受講した「純真学入門」の学長講演で、初めて建学の精神を学習しているが、3年間を経て、その意味を自分なりにどのようにとらえることができたか、社会人に求められる能力と合わせて再考させている。

平成30年度における8回の授業展開を表1に示す。受講者は、学修ポートフォリオとして、1年次から受講した純真学科目の学びレポートや資料で、純真学ファイルを作成している。第1回は、科目ガイダンスとして、1、2年次に受講した科目の主旨を振り返り、導入講義を行った。平成30年度の一流に触れる体験には歌舞伎観劇を企画し、その導入として、日本の伝統芸能について紹介した。能、狂言、歌舞伎、民謡といった伝統芸能について、それぞれの特色や作品、歴史について紹介する内容である。第2回は、代表的な日本芸能である歌舞伎について、博多座職員を講師に招いて、歌舞伎の世界とその舞台裏について語ってもらった。第3・4・5回は、博多座で実際の歌舞伎を観劇し、第6・7回の学内で、『歌舞伎を通して感じた一流とは』、『私が考える学園訓の意味』、『社会人として必要な“人間力”、“統合力”とは何か。それらの能力を獲得するために取り組めること』といったテーマで、グループ討論と発表を行った。受講者は300人に上るため、グループ討論は、各学科で4～5名のグループ編成を行い、純真学専門部会員が運営に携わった。最終回では、各学科の代表グループによる全体発表を企画し、学生間での学びの共通を試みた。

表1. 総合純真学の授業展開

	授業内容
1	科目ガイダンス 日本の伝統芸能と歌舞伎について
2	博多座と歌舞伎の世界、その舞台裏
3	文化施設訪問
4	(平成28年度 音楽鑑賞)
5	(平成30年度 博多座歌舞伎観劇)
6	学科別グループ討論
7	学科別発表会および学科代表グループ選出
8	全体発表

3. 評価

本科目の評価を、受講生を対象とした無記名の授業評価アンケート結果とレポート評価を基に述べる。

3.1 “一流”を知る

歌舞伎観劇については、概ね70%の学生が興味関心を持つことができたと答えていた。また、「一流とは何か、自分の考えを説明できる」と答えたものは80%を超えていた。学生たちが歌舞伎から“一流”をどうとらえたか、以下にグループ討議の内容を一部紹介する。

- ・歌舞伎における一流とは、観客に喜んでもらうことを一番に考えて演技すること。より良い作品に仕上げるために向上心を忘れず日々稽古に取り組む人。
- ・一流とは「その世界で第一等の地位を占めているもの」という意味があった。そして自分の仕事にプロ意識を持って取り組める人だと考える。
- ・歌舞伎は役者同士や裏方の人と、医療職は他職種と連携がなければ成り立たないという共通点があることが分かった。
- ・一流という言葉には、①質・量がある、②品位・品格があるという意味がある。これらの内、「量」と「質」を歌舞伎に当てはめて考えたところ、質には立ち振る舞いや内容、いかに観客と引き込み飽きさせないかということ、量には、一人10役や長時間にわたる公演時間やセリフなどがあたると考えた。しかし、これらのことを成すためには、裏で支えている関係者の力が不可欠であり、連携が大切になる。観客を魅了する“一流”の舞台は一人で作れるものではなく、役者はもちろん、その関係者ひとりひとりが歯車となり、一丸となって作り上げているものであり、これは互いの専門性を尊重し、連携して治療やケアにあたることでより良い治療を行うチーム医療に通じるものがあった。

以上、導入講義にて裏方の仕事の実態を認識していた学生は、歌舞伎役者の技芸に対する感動とともに、その技を支える複数の裏方との連携を実感し、それを医療の現場に重ね、チーム医療との共通点を見出していた。



博多座

3.2 建学の精神を再考する

科目のねらいである「建学の精神『気品』『知性』『奉仕』とは何か説明できる」と答えた者は、80%以上を占めた。建学の精神に関する学長講演からスタートする1年次の「純真学入門」受講後においても、同じ設問で授業評価を行っているが、ほぼ同様の結果だった。自校教育の成果は、学年を経て積み上がるのではなく、初年次教育での印象が最も強く残るのかもしれない。また、以下に紹介する学生のレポート（一部を原文のまま転記）からも、建学の精神は自己啓発につながっており、初年次における自校教育の重要性をあらためて認識した。

①気品とは…

- ・自分自身に自信を持ち、常に冷静に物事を見極め、自分のことだけでなく、他の人にも気を配り、他人へ迷惑になることをしないこと。
- ・私たちは医療人として人の命に関わることになる。対人であるため、優しさはもちろんのことバランスの取れた柔軟な考えを持つ必要がある。具体的には、ルールを守る、礼儀を重んじる、日との立場になって物を考える、きれいな日本語を使う、多様な価値観にふれることを日々の生活で身につけることが必要だと思う。
- ・優雅で落ち着きある言動
- ・驕り高ぶらず常に謙虚であること

②知性とは…

- ・広い視野と探求心を持ち、たくさんの物事に興味を持って一生懸命に取り組むこと。また、好奇心を持って積極的に行動し、多くの経験を積むこと。
- ・専門性に立脚した本質に対する洞察力と教養的視野の広さの両立。
- ・知性には専門と教養が必要であり、それをつけるために学業はもちろん経験を積むことや好奇心を持つべきである。

③奉仕とは…

- ・親への感謝や周りの人に対する謙虚さを持ち、勇気ある行動をする。私たちはこれまで多くの人たちに守られ、助けられ、育ってきた。そのことに感謝し、今度は自分たちが社会のため、新しく生まれてくる命など弱者を守るため、高い志を持って貢献すべき。
- ・社会に対する貢献意識。病院実習を通して医療人としての心構えを持ち、両親などの家族との対話を大事にするべきである。
- ・感謝と行動に移すこと。
- ・人の為に役立つ喜びを知ること。自分を大切にすること。

建学の精神は、大学にとっては、どのような人材を育てるのかを端的に表現したものであるが、学生にとっては、これからどこに向かって自分と向き合うべきかを示す生き方のヒントにもなり得る。毎年、確固たる目的意識が定まらないまま大学生活を迎える新生は、一定数存在するが、複数の学生レポートに、「今の自分を完全に肯定する」ことから始まる学長講演が、前向きな考えに転換するきっかけとなったことが述べられている。日本の若者の自己効力感³⁾は、諸外国の若者と比べて非常に低く、自己効力感の低さには自分が役に立たないと感じる自己有用感の低さに関わっていたことが報告され、問題提起されている³⁾。純真学は、社会に求められる人間を目指して3年間をかけて多様な切り口で、学生個々が目標や志を見出す支援であり、現代の若者の自己効力感へのアプローチにもつながっている。

3.3 人間力について考える

「社会人に求められる能力について自分の考えを説明できる」と答えた者は80%を占めていた。グループ討議も活発に行われており、「グループワークに積極的に参加することができた」「他グループの発表に対して興味関心を持って聞くことができた」と答えた者は85%を占めた。ただ、討議に必要な時間が十分ではなかったとの評価も30%以上を占め、討議テーマや方法については再検討が必要であった。また、3年次には各学科とも実習科目が開講するため、時間的に余裕のない時期に、学外施設訪問や事前準備を必要とする演習を展開することに否定的な意見もあった。以下に、人間力について述べている3名の各最終レポートの内容を一部紹介する（原文のまま）。

- ・私が考える人間力とは、社会の中で自立して生き抜いていく力だと思う。具体的な能力として、一つ目はコミュニケーション能力がある。コミュニケーション能力が劣っていると、得たい情報を得られなかったり、相手との信頼関係が築けない。二つ目は、他者を尊重しお互い高め合う力だと考える。学生時代は、一人で勉学に励むことが可能だが、社会に出ると一緒に働く仲間と協力し合って仕事をすることになる。違う分野の人と連携するとなると、その人の専門性を尊重し合い、互いに考えを共有していく中で高め合うことがとても重要になると考える。……また、その前段階として、相手を知る前に自分を知っておく必要があると考える。大学時代に自分をもう一度見つめなおし、生活や人との関わりを通して自己管理できるよう努力し、思いやりのある行動や感謝の気持ちを素直に伝えられるよう、日々の生活で意識していこうと思う。
- ・社会人として必要な人間力に特に重要な要素だと考えることは3つある。一つ目は知的能力である。これは学園訓の『知性』にあたる要素であり、自分意見を論理的に述べたり、物事を様々な視点から見つめ、問題解決していく方法を見つけたりすることができると考える。二つ目は対人関係能力である。社会人として生きていく中で、様々な年代の人や性格の人と関わる機会が多くなると思う。……三つ目は、奉仕することである。これも学園訓の一つであり、人間力に必要な要素だと思う。特に私たち医療者を目指す者は、他人を思いやる心や見返りを求めない行動が必要だと考える。
- ・人間力とは大きく分けて職業的能力と人間的能力の2つに分かれている。私たちが目指す医療従事者は、人の命がかかった仕事である分、特に職業的能力は大切である。能力の向上を怠らない、誇りを持って仕事を行うことが職業的能力に含まれると思っている。

- ・社会人として必要な人間力には、大きく分けると思考力、対人関係能力、適応力の三つが必要だと考える。思考力とは、物事のとらえ方、解釈の仕方、活用の仕方に大きく関わる。様々な情報があふれている現代において、情報が正しいものであるかの選別、何を思うか、自分の生活にどう生かせるか、これらを適切に判断するために思考力は重要である。次に対人関係能力は、礼儀とコミュニケーションの二つから構成され则认为。分別のある行動や立場をわきまえた行動は礼儀をふまえてのものであり、相手に大きく影響する。人と関わるにはコミュニケーションがなくては意思疎通は不可能だ。……適応力について、どのような環境においても自分の能力を発揮し行動するために必要な能力である。適応力が不足していると、臨機応変な対応が困難になる。このように、社会人として必要な人間力は簡単に身につくものではない。学生の今だからこそできる経験を大切にしながら、これらの能力を兼ね備えた社会人となれるよう努力していきたい。



4. まとめ

医療系大学、特に国家資格取得を目指す学科においては、指定規則に沿った科目と時間数を要し、ややもすれば知識偏重のカリキュラムとなり易いのが現状である。実際、国家試験合格率は、最も影響度の高い大学評価項目であり、専門的知識・技術の修得は不可欠である。しかし、主体的学修態度や生涯学習力は、個々の学生の中の目標や志なしでは期待できない。今回、あらためて総合純真学を振り返るにあたり、本学で学ぶ意味と学生個々の目標や夢を明確化し、社会が学生たちに求めている人間力の意味を考える機会を提供したことは、学生の自己効力感を助け、厳しい医療現場にも誇りを持って飛び込む勇気を与えているのではないかと感じた。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省、中央教育審議会。各専攻分野を通じて培う「学士力」―学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針―。平成20年12月24日。
<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu10/siryo/attach/1335215.htm>
- 2) 内閣府。人間力戦略研究会報告書。平成15年4月10日。
<<https://www5.cao.go.jp/keizai1/2004/ningenryoku/0410houkoku.pdf>>
- 3) 内閣府。令和元年度版 子供・若者白書。
https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01gaiyou/s0_1.html